

1. Iはなぜいつも大文字か



英語の文字は、文中ではふつう小文字で書かれますが、「私は」という意味の I のみがいつも大文字で書かれます。どうしてこういうことになったのでしょうか？

簡単に言いましょ。小文字だとかっこうが悪いのです。代名詞の i は一文字なので隣接の縦棒群の間に埋没しやすいので、読みやすくするために、I はいつも大文字で書くのです。ずっと昔の古い英語では、今のドイツ語 (ich) やフランス語 (je) と同じように「私は」と自分のことをさす単語は小文字で書かれていました (例: 古い順に、ic → ik → ich)。やがて語尾の ch が落ちて、i という i の点のない形になりましたが、見にくく、前後の小文字にまぎれてしまいやすいものでした。たとえば、V や n の後ろだと、w や m の縦の棒と間違えてしまうのです。そこで点のある i という文字に変わりましたが、まだ見にくかったのでしょう。例として、Now is the time when I need her most. (今こそ私が彼女を一番必要とする時だ) という文を考えてみましょう。i を小文字にすると when i need となります。何だかかっこうが悪いですね。そんなわけで、やがて、I というように、それを大文字で書くようになったのです。

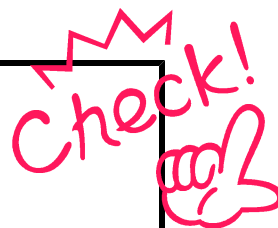
つまり、小文字の i が、他のスペリングと混同されるのを防ごうとする正字法の習慣によるものなのです。小文字の j は、中世の写本には点のない i という形で現われましたが、11世紀以降、一種の区別的発音符として点が添加されるようになって i が誕生したわけです、この i は、語頭および語末にあるときには、j のように下に伸ばされたり、I のように上に伸ばされたり、あるいは上下の両方へ伸ばされたりするのが、だいたいの習慣でした (ただしこの j は近代英語の j [dʒei] ではありません)。そのような習慣から、i が孤立している場合にも 'long i' (つまり j) が用いられるようになり、印刷術の普及に伴い、それが近代英語の代名詞 I となったのです。

また、以前は数字の 1 (one) を j、同様に 2 (two) を ij、3 (three) を iij で表していたので、代名詞の i (すなわち j) と紛らわしいところがありました。それが代名詞のほうに大文字を使うことによって、そういった紛らわしさが取り除かれたわけです。これが I の歴史です。

【参考】堀田隆一「なぜ一人称単数代名詞 I は大文字で書くか」英語史ブログ(検索サイトで検索してごらん)

紛らわしさを避けるため

i と文字では目立たないので使っていたが、印刷が普及すると、もっと目立たせる必要が出てきて、そのときから大文字の I が文中でも使われるようになった。



2. yをiに変えて-esとは何だ?



現代英語では、母音字としての **i** と **y** は、同じ音を表わしていますが、古期英語の時代には、この2文字は異なった母音を表わす文字でした。i は平口 (非円唇) 母音が (spread vowel; unround (ed) vowel) を表わしていたのに対して、y は現在のドイツ語の u のように丸口 (円唇) 母音 (round (ed) vowel) を表わしていたのです。つまり、i と y は舌の構えは同じですが、唇の形だけが、i では今の [i] と同じく平らになるのに対して、y では丸くなるというふうに違っていたのです。ところが、中期英語の時代になると [y] の音の特徴であった丸口がなくなって [i] の音と同じものになりました。たとえば、fyllan (=fill) は [fyllan] → [fyllan] → [fyllə] → [fil] のような過程をたどったわけです。発音がこのように [y] から [i] に変わったのにもかかわらず、文字のほうは以前のままだに y と綴られていました。しかしまた同時に、新しく i の字を用いようとする傾向も生じてきましたので、[fill] などには fyll、fill の2つの表記法が存在していました。y と i が好き勝手に語中に現れていたのです。

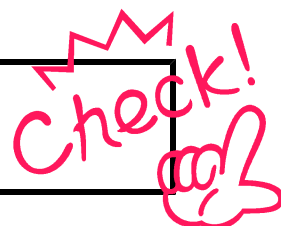
綴字法 (Orthography) は中期英語の末期までは混乱の状態であって、書く人の自由に任されていました。作者自身よりも、それを本にする人々の手で勝手に綴られ、同一の語が1つの段落の中で異なって綴られる場合すらあったのです。初期の印刷業者や書き手の中にはフランス人などの外国人もいましたが、これらの人々や、英国人でも外国、とくにオランダ・ドイツなどで訓練を受けた人々は、その両方の習慣を英語の綴り字に持ち込みました。また、一般に教育の程度が高くなかったことも、各自が勝手な綴り字法を使用する傾向を助長していたようです。しかし1476年に印刷術が英国に輸入され、さらに18世紀の中ごろに辞書が出版されるようになりますと、この混乱した綴り字にも標準化の傾向が生じました。かくして、17世紀の中ごろから18世紀末までの1世紀半の間にだいたい今日の綴り字の基礎がつけられたと考えてよいようです。

さて、family は、はじめは familie、famylye、famylic などと、いろいろに書かれていましたが、綴り字の標準化に伴い、語の中間の [i] を i で、語尾の [i] を y の文字で書き表わす習慣が次第に確立されてきましたので、この語もいつも family と一定した綴りで書かれるようになりました。ところが、一方複数形の families という綴りのほうは、これとは関係なく古い単数形たる familie の複数形として、もともと存在していたものです。ie の i は語尾ではありませんから、y に改められないで、そのまま残ったのは当然のことでしょう。こうして現在の family [単数]、families [複数] という2つの形ができたわけです。アメリカの大手銀行 Citibank が Citybank にならないのはそんなわけなんですね。

baby - babies、happy - happiness などの例でも、歴史的には y 以前に ie、i があつたと考えるべきであって、「y が i に変わる」という歴史的変化があつたわけではありません。したがって、family、baby などの複数形を作るのに「y を i に変えて-es をつける」と説明するよりも、「y を ie に変えて-s をつける」と説明するほうが歴史的には正しいということになります。分かりましたか? ギリシャ語起源の語にはこの原則が適用されないまま残っています (hymn, psychology, rhythm, synonym, etc)。

なお、「母音 + y」にこのルールが適用されないのは、y を i に変えると decay → decaied のようになって、母音が3個も並んでしまうからです。

語中の [i] に i を、語末の [i] に y を!



3. なぜ子音を重ねるのか？



英語の母音字には、「短音」と「長音」という2つの読み方があることをご存じですか。

短音		長音	
hat	ア	hate	エイ
pet	エ	Pete	イー
bit	イ	bite	アイ
hop	オ	hope	オウ
cut	ア	cute	ユー

「マジックe」はアルファベット読みをなささい、というしるしだ！

上の表の左右の語の発音の違いに注意しながら、それぞれの単語を読み比べてみましょう。左側の単語の最後に e を加えると、e 自体は発音されないのに、前の母音字の読み方が変わることがよく分かるはずです。左側の発音を母音字 a, e, i, o, u の「短音」、右側の発音を「長音」と呼びます。このように子音字の後に登場する e には、この子音字を飛び越えて、その後に控えた母音字の読み方を「長く」する働きがあるのです。「マジックe」ですね。それぞれの母音字の「長い」発音は、個々のアルファベットの名前と同じ、「エイ」「イー」「アイ」「オウ」「ユー」となることに注意してください。また gym, type といった例でもわかるように、y は母音字 i と同じ働きをすることがあります。

ではここで母音字 a, e, i, o, u と y の、最も基本的な読み方のルールを覚えましょう。

- 1音節語では、単語の終わりに子音字だけがつづけば、前の母音字は短音
- 単語の終わりが「子音字+e」なら、前の母音は長音になる。

この規則を知っていれば、flag, depth, trim, dock, tug などの母音字はみな「短く」発音され、mate, mile, smoke, fume などでは、「長く」発音されることがわかり、何も辞書で発音を調べなくても、簡単に読めるのです。このように発音と綴り字の規則を学習しながら綴りを覚える方法は、**フォニックス(phonics)**と呼ばれ、実際に英語圏の子供たちは、このようにして綴りを学習していくのが普通です。【参考】足立恵子『アメリカの子どものように英語を学ぶ本』（中経出版）

ではここで、短音を含んだ hop と長音を含んだ hope を過去形と進行形に変えてみてください。正解は hopped, hopping と hoped, hoping ですが、hop では最後の子音字を重ねなくてはならない理由がよくわかりますね。そうしなければ hop と hope の区別がつかなくなってしまうのです！このように**2つ重ねた子音字（2重子音字）には、前の母音字が短音であることを示す働き**があるのです。中学校で、big — bigger, run — runner, shop — shopping などの例で、最後の子音字を重ねるよう口をすっぱくして指導されたのは、みな**前の母音を短く読ませるため**なのです。

そこで、この規則をまとめておきましょう。

同じ子音字が繰り返された2重子音字の前の母音字は「短音」になる。

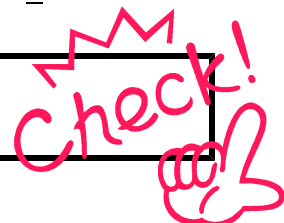
以下の例を見てください。子音字が重なっている場合はみな短音に、子音字が1つの場合は長音に読まれています。綴り字にもある程度のルールがある！ということです。

latter — later

dinner — diner

ladder — radar

前の母音を短く読むため



4. goの過去形はwent? ～ついでに不規則動詞の活用の謎も～



「went って何だ?」って思ったことありませんか? 「何言ってるんだ! go の過去形じゃないか!」って思うでしょうね。それはそうなのですが、でも、思いませんか? いくら**不規則変化動詞**だからといっても、go と gone はいいとしても、went は go とはあまりにも違うと思いませんか? go のどの音が w の音などになるんでしょうかねえ。take — took — taken なら不規則変化動詞といっても、許せますが、go — went — gone は許せない!

実は、これにはおもしろい話があるんですよ。皆さんがお持ちの英和辞典で **wend** という単語を引いてみて下さい。現代英語では使われませんが、「行く、進む」という意味の単語なんです。この **wend** は **wend — went — went** と変化する動詞です (send — sent — sent と同じですね)。15世紀頃、この went が go の過去形として使われるようになりました。その後 wend は使われなくなり、過去形の went のみが使われるようになったのです。ですから、go と went は本来、全く別々の単語だったんですね。ではなぜ went が侵入してきたのでしょうか?

さてみなさん、動詞の過去や過去分詞の変化が全部**-ed** を付けるだけの**規則変化**だったら覚えやすいのに、なぜ変化形が異なる**不規則動詞**などというものがあるのでしょうか。実はこれは、頻度の高い動詞に、昔の変化形が残った、という事情があるのです。このことも先に述べた英語の歴史に関係があります。現代の英文法で時制というと、原形、過去、過去分詞の3つの形があげられるのが普通です。しかし、古英語の場合は、過去形が単数と複数の2つに分かれ、全部で4つの形がありました。その一つの例を bind (結ぶ) を用いてあげてみると、次ようになります。ちなみに、bind の現在の変化形は、bind — bound — bound ですが、昔と変化のしかたがかなり違うことに気づきます。

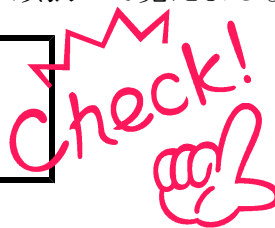
	原形	過去単数形	過去複数形	過去分詞
bind	bind-an	band	bund-en	ge-bund-on

しかし、このように複雑に変化する動詞は、時代の流れと共に今日のような簡単な規則的動詞に変わってきました (**単純化**)。その中で昔のままの複雑な変化をとどめている**不規則動詞は、日常的によく使われる頻度の高い動詞、つまりよく使われるので、規則変化の波にのまれにくく、古い変化形を忘れられるひまがなかった**、という動詞が多いのです。そういった動詞をいくつかあげてみると、do — did — done、go — went — gone、eat — ate — eaten、see — saw — seen、drink — drank — drunken などがあげられます。最後の drink (飲む) を古英語の変化形で表すと次のようになり、現在とほとんど同じだということに気づきます。

	原形	過去単数形	過去複数形	過去分詞
drink	drink-an	drank	drunk-on	ge-drunk-en

これらの動詞は、家庭においてほとんど毎日使われる言葉で、古い複雑な変化形も忘れられることがなかったのです。たとえば子供が “drink — dranked — dranked” と間違えて言った場合、近くにいる父や母がただちに直させることができたのでしょう。そういう種類の動詞が**不規則動詞**として残ったのです。不規則動詞に日常語が多い (活用表を見てごらん) のはそのためです。とはいっても、昔にくらべ現在では、複雑な不規則変化はかなり少なくなっているわけです。昔の人の苦勞にくらべれば、みなさんはまだ楽なほうなんですよ。頑張って覚えましょうね。

wentは違う単語の過去形だった!



5. 三単現のSって何？



「なぜ三単現の-(e)sは必要なのですか？」と尋ねられたらどう答えますか？困りますよねえ。規則だから、としか答えられないでしょうね。でも、この「規則だから」ってのは答えていることにならないですよ。ただ、事実を述べているに過ぎないからです。もちろん、完全に全てを説明できるわけではありませんが、少なくとも、質問した人に、ある程度の納得のいく答えのようなものが欲しいですね。

この問いに答えるには、ヨーロッパの言語を勉強すれば、すぐにわかります。ドイツ語やフランス語、スペイン語をとれば、三人称、単数、現在の場合に限らず、特にスペイン語などは、主語の人称、性、数により、動詞の語尾変化がすべて異なります。英語も昔はスペイン語のように、主語により動詞の語尾変化が変わったのです。でも、時の流れの中で、「単純化」の流れにのって徐々に語尾変化がとれていってしまい、現在では三人称、単数、現在の場合にのみその語尾変化が残っているのです。ですから、「なぜ三単現の-(e)sはつくんですか？」と言う問いには、「三単現」の場合だけがつくのではなく、三単現の場合だけ昔の面影が残っているということになるわけです。

三単現の-(e)s が、英語の歴史的発展における単純化というプロセスに関係していることを述べましたが、英語はこの単純化が極端に進んできた言語であるといえます。ドイツ語では冠詞も人称、性、数、格により変化します。昔は英語もそうでしたが、単純化のため今では冠詞は全く変化しません。名詞の語尾もドイツ語と同じように格変化しましたが、今では **who — whom** 以外では変化しませんね。この語尾変化の単純化による省略のために、語順が決まってきたわけです。日本語など、「が」や「を」さえつければ、語順はどうでもいいですよ。英語はそういうわけにはいかないですね。Mary hit John. と John hit Mary. では全く事実が異なります。「単純化」というプロセスは三単現の-(e)s に限らず、英語の発展に大きな意味を持っているのです。

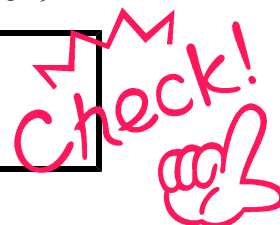
そのことを知るためには、古い英語を考えてみる必要があります。英語が文献にはじめて現れた時代、つまり700年頃から1100年頃までの英語を**古英語 (Old English)** といい、現在の英語の基礎になっています。その頃の英語は今と違って、動詞は主語の人称や数に応じて、それぞれ違った形をとっていました。古英語の時代の動詞の人称による変化形を、あげてみましょう。たとえば、bindan (= bind) [結ぶ] という動詞は次のように変化していました。

	1 人称	2 人称	3 人称	複数形
現在	bind-e	bind-est	bind- <u>ep</u>	bind-ap
過去	band	bund-e	band	bund-on



上のように現在形ばかりでなく、「過去」においても人称、数にして複雑に変化していました。しかし言語は常に**単純化**される傾向があります。だから、時がたつにつれ、上記のような複雑な語尾変化は単純化していき、1 人称、2 人称の語尾変化はなくなり、3 人称単数の現在形にだけ-ep が変形した語尾-s (es) が残ったのです。これで分かったでしょう？

三単現の-sだけが生き残ったのだった！(過去の遺物)



6. have+過去分詞で完了形？



中学校で**現在完了形**の作り方を習いました。「have+過去分詞」の公式をしっかりたたき込まれたものです。これは公式ですから、覚えるしかしょうがないのです。でも、それにしても、現在完了形って、なぜ「have+過去分詞」で作るのでしょうか？

毎度の、奇妙な、でも素朴な疑問です。現在完了形の have 動詞って、何の疑いもなく助動詞だと思っていますよね。もちろん、それは正しいわけですが、同じ助動詞でも can や must など、助動詞としてしか用いられませんが、have は所有を表す本動詞としても用いられますね。例えば、I have a Porche.のような文の have です。

歴史的に現在完了形の生い立ちは、もともと I **have the job finished**. (私は終わらせた仕事がある) という表現で使われていました (8世紀末まで)。しかし過去分詞形 (～された状態の) の意味が動詞 have (持っている) より強いため、過去分詞形が動詞の場所に移った結果 (近代英語期 1500年～)、「have+過去分詞」が1つの動詞群と考えられるようになり、現在このような形になったのです。 I **have finished the job**.

完了形の作り方を考えるとき、次のように考えてみてはどうですか？

John **has finished the job**.

この現在完了形の文を、次のように分解して考えてみます。

John **has** [**finished the job**].

S V O

抱えている 仕事を終わったことを



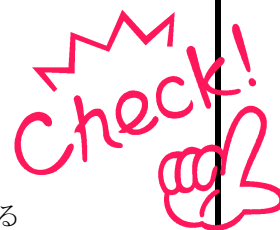
have を本動詞と考え、finished the job がその目的語だと考えるわけです。目的語の finished the job は、finished の-ed 形が示すように過去の出来事を表しています。つまり、「その仕事を終わったこと」という目的語だと解釈するのです。その目的語の内容を John が持っている (「所有」) しているのだと思って下さい。すると、見えてきますね、完了形の形が。上の文全体をこのような解釈でバカ丁寧に解釈すると「John は、その仕事を終わったことを、現在所有している」となります。この解釈から、「John はその仕事を終えたところだ。」という現在完了の意味が出てくるのです。完了、経験、継続、結果の4つの意味があると習った人もいるでしょうが、決してそうではなく、あくまでも「～だったことを抱えている」というたった一つのイメージで説明できるのです。

このように考えると、現在完了形というのは、結局は**現在形**なのですから、例えば、*John has made it yesterday.のように、過去を表す副詞 (ago, when, last) とは一緒に使うことができないのは当たり前ですね。以上、現在完了の正体でした。

have V-ed ... ①完了 ②経験 ③継続 ④結果 の意味

あくまで現在形だ！

★過去に何かやったことを今「持っている」の意味で have が使われる



7. 不定詞のtoと前置詞のtoは別物？



英語の不定詞（‘定め’を‘不受’（受けない）^{ことば}詞とは、この名前もどこか変ですね？調べてみましょう）は普通 **to** をつけますねえ。この **to** って、前置詞の **to** と同じスペルですが、何か関係あるんでしょうか？って質問を受けたことがあります。そういえばそうですね。同じスペルですが、一方は動詞の前につけて、他方は名詞の前につけますね。ですから、まったく別のものと考えてしまいますし、また、それが普通でしょう。

でも、調べてみると、この2つ、やはり起源は同じなんです。不定詞のtoも、もとは前置詞のtoなんです。

不定詞というものを初めて習ったときのこと、覚えていますか？不定詞には3つの用法がありました。名詞的用法（例えば、I want to go.）、形容詞的用法（例えば、books to read）、そして副詞的用法です（例えば、I came here to see you.）。これらの用法の中で、名詞的用法は、その名の通り不定詞全体が名詞なのだと学校では習ったと思います。でも、昔の英語では、to などつけなくてもそれだけで名詞になったんです。ですから、I want to go.で説明すると、go だけで名詞だったのです。その名詞に前置詞の to をつけて、「私は、行くということ(go)に対して(to)欲する状態にある(want)」ということだったのです。前置詞の to と不定詞の to は同じ起源なのです。

ところで、不定詞で主語を言いたいときは for をつけると習いますよね。例えば、I'm eager for John to come.のように。I want to go.の例文で述べたように、go だけで名詞なのでその前に前置詞をつけたわけですが、この「前置詞+名詞」が、時代の流れとともに、まるで文のように考えられるようになりました。文なら主語があってもいいはず。そこで主語をつけると John to go となりますね。そして、もともと不定詞全体が名詞だったわけですから、この John to go という文も、全体で名詞であると、再び解釈されなおして、さらに前置詞の for をつけたのです。for には「～を求めて」という意味がありますので、この意味から、I'm eager for John to come. の場合、「私は、John が来ることを求めて、欲している」と言う意味から、「私は John に来てほしい」という意味になったわけです。

繰り返します。不定詞の to は、実は前置詞の to 出身なのです。

I go to school. 私は学校に行っています。

この to は「着点の方向へ向かっている」というイメージです。それと同じで「～の方向（未来）へ向かっている」という意味で to の後でそれを情報を追加して説明するという構造です。ではなぜ名詞ではなく動詞の原形を従えるようになったのでしょうか。

I go to work.

上の文で work には名詞の「仕事」という意味の他に、「仕事をする」という動詞の意味もあります。このように名詞と動詞の同形の語があることによって、混同して使われるようになり、それが次第に to の後に動詞の原形が置かれる、つまり不定詞の用法へと発展したのです。

中学校で不定詞の名詞用法、形容詞用法、副詞用法と習いましたが、実はそれはこの「方向性」という1つの意味を押さえておけば全部理解できるのです。

名詞用法

I want **to** work in a hospital. ⇒ 病院で働くという方向を望む

形容詞用法

I have a lot of things **to** do. ⇒ これからするべき方向のものがたくさんある

副詞用法

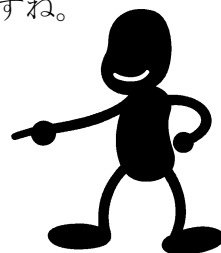
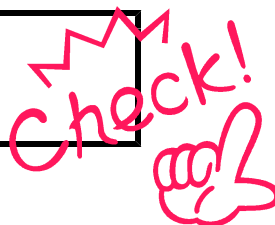
I went to the library **to** study. ⇒ 勉強するという方向へ向かって図書館へ行った

I'm glad **to** meet you. ⇒ あなたに会えるという方向へ行ったらうれしい

He grew up **to** be a baseball player. ⇒ 大きくなって野球選手の方向へ進んだ

どうです？バラバラに暗記するようなことではないことが分かるでしょう。文法の時間に出てきた「不定詞しか取らない動詞群」(expect, promise, refuse, etc.) もこれで納得ですね。

起源は一緒！



8. Good-bye が「さようなら」?

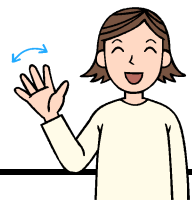


挨拶の言葉は、ほとんどイディオムに近いので、考えてみると奇妙な言い方が、ふだんあまり気にもとめられず用いられています。英語の朝、昼、晩の挨拶はすべて、**Good** +～で表されます（よい～をお迎え下さい）。これはこれで統一性があるからいいじゃないですか。でも、「さようなら」の意味の **Good-bye** ってのは、いったいどうしてこれで「さようなら」の意味になるんでしょうねえ。

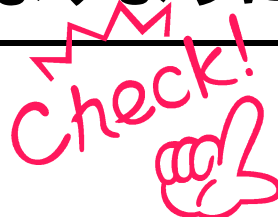
実はこれは、**God be with you.** という祈願文が縮約されたものなのです。皆さんが私と一緒にいたとします。一緒にいる間に皆さんに何か起こったら、私は全力で(?) 皆さんを助けます。でも、皆さんと別れてしまえば、もう一緒にいないわけですから、皆さんにたとえ何が起こっても、私は皆さんを助けてあげることはできません。ですから、私と別れた後は、「神様が皆さんのそばにいらして、神様がお助け下さいますように」という祈願文が、「さようなら」の意味になったわけです。少し前の英語では you は ye と書いたことがありました。ですから、Good-bye の最後の ye は、奇妙に思っていたでしょうが、これで謎が解けたことと思います。

ついでですが、英語の Good-bye よりも、もっと奇妙なものがあります。Good night. （よい夜をすごしてください）に当たる日本語です。夜寝る前に家族の人に「おやすみ（なさい）」って言うわけですが、考えてみてください、自分が寝に行くのに、他の人に対して命令文(?) を言ってるんですねえ。何じゃこりゃ? 日本語の「さようなら」は、よく時代劇などでお殿様が家来に向かって「左様か、左様か」と言っていることがあります。あの「左様」なのです。つまり、接続詞「そのようなら」という意味の「左様なら」がそのもとだと言われています。うーん、語源っておもしろいですねえ。

【参考】日本語の「さようなら」の諸相については竹内整一『日本人はなぜ「さようなら」と別れるのか』（ちくま新書）に詳しい。



God be with you. のつまったもの
「神があなたと一緒にいますように」



9. mustの過去形がない理由



助動詞の **can** や **may** には過去形があるのに **must** には過去形がなく、「～しなければならなかった」と表現したい場合には "**had to**" を用いなければなりません。**can** の過去形は **could** ですが、では **must** の過去形は何でしょうか？ **must** は、もともとはこれが過去形で使われていた時代がありました。12世紀中頃から15世紀末までの英語では、**may** の意味で使われていた **mote** の過去形として、**must** が使われていたのです。ところが、その **must** が「～しなければならない」の意味で使われるようになってから、いまのような現在形だけで使われるようになりました。ですから、歴史的に見ればもともと過去形だったこの **must** には過去形が存在しないということになります。

「～しなければならない」が **must** ならば、では、「～しなければならなかった」はどう表したらいいのでしょうか？いま、言いましたように **must** には過去形がないわけですから、まったく別なことばを使うことになります。**have to**（または **has to**）を過去にした **had to** を使います。

This morning I *had to* go to school by bus because my bicycle was broken.

（自転車が壊れてしまったので、今朝はバスで学校へ行かなければならませんでした）

ここで **must** と **had to**、**have to** の使い方をまとめてみましょう。

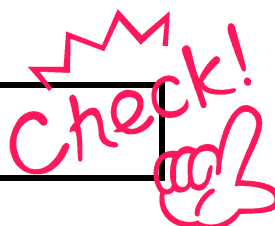
現在形	過去形	未来形
must	×	×
have to has to	had to	will have to

実はこの **must**、1000年ほど前までは **moste** / **moston** というように過去形があったのです。今の **must** は実はこの過去形である **moste(n)** に対応していますが、意味は過去を表していません。実は仮定法の過去形 **moste**、**mosten** に由来しています。14世紀頃から仮定法の過去形が現在形とほとんど同じ意味で使われるようになったため、本来の現在形の **mot** がなくなってしまいました。

そのためこの過去形の **must** が「ねばならない」という意味で現在形と意識されるようになったのです。つまり **must** そのものが過去形であるために **must** には過去形がないのです。

同じ現象として **owe**「負う」の仮定法過去形であった **ought** が「～するべきだ」という助動詞になったことが挙げられます。この **ought** も元々は過去形であった、ということです。そこから何らかの「負い目」があり、負い目の対象に対して **to** ～となるのです。あることがらに対して「そうすることが正当である [好ましい]」という意味になるのです。

mustは過去形だった！



10. baseballにtheがつかない理由

watch TVとlisten to the radio

楽器のplay the piano

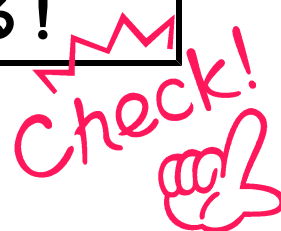


まずスポーツ名の play baseball の baseball ですが、これに冠詞 (a, the) がつかない理由は、baseball が「野球のボール」を意味しているのではなく、「野球のゲーム」を意味しているからです。baseball は比較的新しいスポーツですが、古くからある football や tennis などは、昔は the がつけられて用いられた時期もあります。しかし、時代が変わり、それにつれて英語もしだいに変化していき、冠詞の the が省かれるようになりました。そして現在では、どのスポーツでも動詞 play とともに用いられる場合には、冠詞がつけられなくなりました。

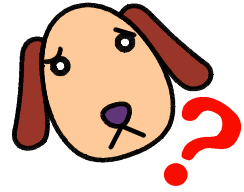
一方、watch television もスポーツの場合と同様、はじめは the がつけられていましたが、あとになってその the が省かれるようになったものです。つまり、テレビができた頃の頃は、テレビの機能がまだ一般に知れわたっていなかったために、watch the television として the がつけられていました。しかし、その後テレビが一般家庭にも普及し、その用途や機能も明確に知られるようになってからは、the がとれて、現在のように watch television というような固定したものとなったのです。英語も時代とともに少しずつ変化しているということがわかっておもしろいですね。さて、watch の対象は画面上の番組そのものです。watch the TV とすると「物としてのテレビの箱をずっと観察する」という妙な意味合いになってしまいますね。これと対照的なのが listen to the radio です。基本的にラジオは物であり、物体としてのラジオの物の方に耳を傾けるわけです。これで radio に the がつく訳が分かったでしょう。

また、楽器には原則 the をつけて play **the** piano と言います。ピアノという「楽器を弾く曲やピアノの素晴らしい音色」というその楽器で行われる本来の機能を意識すれば、もはや楽器ではなく抽象的な音楽の方に中心が移りますから無冠詞となります(cf. go to school/go to the school)。楽器に the をつけるのは「あなたもご存じのいわゆるピアノ（総称としてのピアノ＝ピアノというもの）」という意味合いです。実は、play a piano も play piano も文脈があれば可能です。それぞれの意味の違いを探ってごらんください。

theがついたり、つかないのにも理由がある！



11. tomorrowには なぜonがつかないのか?



「土曜日に」とか「日曜日に」というときには **on Saturday** とか **on Sunday** のように **on** がつくの、**tomorrow** のときはなぜ **on** がつかないのですか?

中期英語（1100～1500年ごろの英語）では、**tomorrow** は **to morwen** のように2語で表されていました。しかし、次の200年の間に、発音の変化が生じて、**tomorrow** のように1語で書かれるようになったのは18世紀に入ってからです。

では次の文を比較してみましょう。

- 1) I will play tennis *on Sunday*. (私は日曜日にテニスをします)
- 2) I will play tennis *tomorrow*. (私はあしたテニスをします)

少し文法的に説明すると、



1)の **On Sunday** の **Sunday** は「日曜日」という名詞で、**on** は「～（の日）に」という前置詞です。全体で「日曜日に」という時を表す副詞句になっています。

一方2)の **tomorrow** は、これ1語で「あした（には）」という時を表わして使われています。「日曜日に」も「あした」もこれから先のことを表すのに、日曜日を意味する **Sunday** の前には **on** がついて、**tomorrow** には **on** がつかないのは不思議な感じがしますよね。実は **tomorrow** は **on Sunday** のように2語で使われていたことばです。

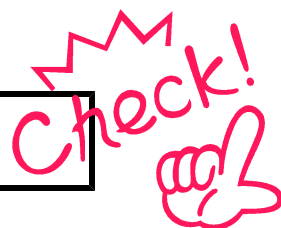
有名な作家シェークスピア（Shakespeare 1564～1616）が生まれる少し前までは、**tomorrow** は **to morwen** として使われていました。**morwen** はもともと「朝」という意味のことばだったのですが、それが **to**（～に向かって）と一緒に「翌朝」から「翌日、あした」と意味が変化したというわけです。**to** は **today** と同じ特定の日を表す前置詞、そして **morwen** は1000年以上前は **morgen** でした。意味は「朝」で、ドイツ語ではいまでも **morgen** は「朝」という意味です。ところがこの **morgen** には「今日または特定の日の次の日」という意味もあったようです。そこから「次の朝」つまり「翌日」という意味になったのでしょう。

morning は **morn** に **ing** がついたものですが、これは **evening** の影響を受けたものです。

また **today** ですが、**to** はふつう「～まで」の意味を表す前置詞の **to** ですが、**today** では **on this day**、つまり特別の日を表す「今日」を示します。この用法は1000年以上前からあったようです。

次に **yesterday** ですが、**yester** が本来は「現在の前・後」を指す形容詞で、**day** と結びついて「前の日」、「後の日」という意味になります。元々はこの両方の意味があったのですが、「今日の前」だけを表すようになりました。つまり **yester** の意味が狭められたということになります。

ちゃんと前置詞がついている！



12. if it were not for…が なぜ「もし～がなければ」の意味になるか？



「もし…がなければ」という **if it were not for** …という節で、この **it** は何を指すのでしょうか。また、**for** はこの場合どういう意味を表わすのでしょうか。さらに全体でどうして「もし～がなければ」という意味になるのでしょうか。仮定法が出てくる度に疑問に思うことです。

この問題点3つについて、個別に検討しましょう。

1. itは何をさすか？

この **it** は文法で「ばく然たるそのときの状況を指す」いわゆる「環境の **it**」または「不定の **it**」と呼ばれているものです。

しかし、「ばく然たるそのときの状況」というものは、本当にばく然としていて何だか分からないものかということ、そうではありません。これは常識からも判断されることで、少なくとも話し手はすでに何であるかを承知して **it** と言っていると考えるのが妥当でしょう。そこでそれが何であるかを突き詰めていくと、**If it were not for your help, I could not do that.** という文ならば、けっきょくこの **it** は「助けを必要とする今の状態」「困っている状態」を指していると言えましょう。

2. forはどういう意味か？

この **for** は本来 "because of" もしくは "on account of" の意味で「原因・理由」を表わします。

3. if it were not for…は、どうして「もし…がなければ」の意味になるのか？

これに対するお答えは、すでに **1.** と **2.** によって尽きていると思いますが、念のために上の例によって説明しますと、「私の困っている今、あなたの助けのおかげがなければ」すなわち「あなたが助けてくださらないと」の意味となります。

別の例で考えてみましょう。

If [**it**] were not **for** music, my life would be boring.



for
because of 「～の理由で」



事実（現実）：私の人生はいいものだ



直訳：もし現在の世界で音楽があるという理由で私の人生が楽しいものとなっているのでないと仮定すれば、私の人生は退屈なものになっているだろう。



含意：現在私の人生が楽しいのは音楽があるからである。



仮定：もし現在音楽がなければ、私の人生は退屈なものになるだろうに。 《コレが意味》

これと同じ意味の成句で、**but for** ～というのがあります。これも **but** が「しかし」ではなく「～以外に」という意味だと分かれば、疑問は氷解するはずです。「私の人生が楽しいものであるのが、音楽以外のためであるなら私の人生は退屈なものになっているだろう」と考えるのです。これで分かりましたね。

13. as it wereが なぜ「いわば」の意味になるか？



He is, *as it were*, a grown-up baby. (彼はいわば図体の大きい赤ん坊だ) というような場合の **as it were** はどうして「いわば」という意味になるのでしょうか。as it were を文法的に説明してみましょう。

実は、**as it were** の **as** は **as if** の意味です。今日では一般に as if または as though と言うところを、古い英語ではただ as と言ったのです。

このような as の使い方は今では古語とされていますが、ただひとつ **as it were** だけが慣用として残っているのです。Oxford English Dictionary(OED)はこれを as it were so、if one might so put it、in some sort と言いかえ、「語または文が、実際的にはそのとおりなのだが、形式的には正確ではなかろうということを示す挿入句として用いられる」とつけ加えています。

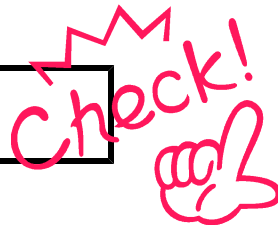
この as it were という成句は、一種の文修飾の副詞節で、‘as if it were so’ ‘if one might so put it’ の意味です。つまり、ある表現が、論理的には正確ではないが、実質的にはそういう表現を用いてもよいということを示す副詞節です。

この接続詞 as は古い用法で、その導く節に仮定法の動詞をとり、as if の if を伴わずして今日の as if の意味に用いられた as です。この古い as が、as it were という成句の as に今日残っているのです。もともと、まれには、as if it were (= as it were) と、if のある言い方もあります。

もう一つ大切なポイントは、仮定法では be 動詞は常に **were** を使うのですが(最近では was も多い)、これはどうしてでしょう？これは宿題ということで、みなさん調べてみましょう。ちゃんと理由があることが分かりますよ。



asはas ifの意味



14. 「人」は-erそれとも-orそれとも-ist？



動詞がその行為者を表わす場合に、下の (1) のように**-er** を加えるものと、(2) のように**-or** を加えるものとあります。

(1) interpreter tester runner

(2) visitor inspector inventor

これには何か区別する規則のようなものがあるのでしょうか。それとも語源的にこうなるのでしょうか。また、**-er** の語と**-or** の語とでは、どちらが実際には多いのでしょうか。

綴字の、**-er**、**-or** の相違はおもに語源的なものです。したがって、英語の学習者に役だつ規則としたら「**-ate**で終わる動詞についてはたいてい**-ator**となる」くらいしか言えないでしょうが、もう少し詳しく言いますと、次のようになります、

i) **-er** は英語固有の接尾辞、**-or** はラテン語系の接尾辞である。

ii) ラテン語から派生した動詞、とくに**-ate**で終わる動詞の大部分には、**-or** をつけることが多い。act、create、invent、conquer、govern、purvey など。

iii) **-er** は現存する英語の動詞のどれにも付加することのできる生きた接尾辞である。

iv) 普通には**-or** をつけ**-er** の形はまれにしか用いない動詞もある、visitor と visiter など。

v) **-er**、**-or** の両形を有する（ときにはその綴字によって意味の違いがある）ものもある。sailor（船員）と sailer（帆船）など。

なお「行為者を表わすのに、**-er** の語と**-or** の語とではどちらが多いか」に関しては、**-er** の語のほうが多いようですよ。

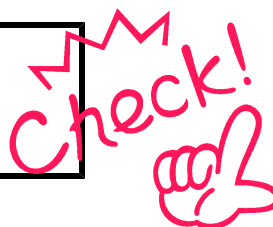
なお、**-ist** は名詞や形容詞につけて「人」を表します。

piano → pianist

violin → violinist

social → socialist

-erは英語本来の語に
-orはラテン系の語に



15. October と August ?



英語で10月は **October** っていうのは中学生でも知っています。でも、Octo-って聞くと、「たこ」の octopus を連想しませんか？ もしそうなら、「たこ」は数字の8とどうしても関連づけてしまうから、8月なんじゃないの？って思いますねえ。音楽の「オクターブ」(octave)も「8度の音程」です。そう、実はそのとおりで、もともと **October** は8月だったのです。こう考えると、8の次は **nine** だから **November** か、小学校の時、液体の量を量る単位はリットルで、その十分の一が「デシリットル」だったから、そうか「デシ」は10という数字と関係があるなあ。decade (10年間) も10ですね。そしたら **December** の Dece-は10で、10月か、うまくいくなあ、ってことなんですが、いかがですか？

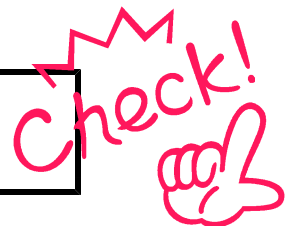
納得！ですね。でも、すぐに疑問が生まれます。「なんで、二ヶ月ずれたの？」

では、**October** の前を見てみましょう。**September** ですね。sept は seven ですから (ラテン語で「7」を意味する septem)、本来7月。ここもずれてますね。じゃ、その前は？ **August** ですねえ、むむむ。。。その前は？ **July** ですねえ、むむむ。。。困ったなあ。

ここで、なんと世界史の時間になりまーす。世界史を勉強したときに「ユリウス暦」っていうの、覚えてますか？そうです、**ジュリアス・シーザー (Julius Caesar)** が修正したカレンダーのことです。えっ？もう気がついた？ジュリアスのスペリングって July と似てる？ Bingo! そのとおりです。実は July はシーザーの名前から来ているのです。すると、世界史に強い外大生(?) (東京外国語大学の二次試験科目は英語と世界史) なら、シーザーの姪の息子である初代ローマ皇帝オクタビウス (Octavian) で、彼が帝位についた際にもらった称号が **アウグスツス (Augustus)** だったことを思い出すでしょう。これで疑問が解決しましたね。シーザーとアウグスツスの2人の名前が入ったため、2ヶ月ずれてしまったのです。それぞれ自分の誕生月であることにちなんで名前を付けたのです。権力者というのは、いつの時代にあっても、権勢欲、自己顕示欲が強いものですね。

こうなると、「じゃあ、1月の January は？ 2月の February は？。。。」ってことになりますねえ。えっ？そうです、この先は自分で図書館で調べてください。Oxford Dictionary of English Etymology という語源辞典があります。また、日本語で書かれている語源辞典でもいいでしょう。是非、自分で調べてみましょう。

割り込んだ権力者名！



16. second はなぜ「秒」か？



何故 **second**（2番目の）に「秒」という意味があるのでしょうか。

second という単語は「2番目の」という意味ですが、元々ラテン語でフランス語経由でイギリスに入ってきたものです。では、何故この単語が時間の単位である「秒」という意味を表すようになったのでしょうか。

英語で「2番目の」という意味を表すものとして **other** がありました。ところが **other** は「もう一つの、他の」という意味も兼ねていたので、やがて **second** が「2番目の」という意味を全面的に引き受けることになりました。

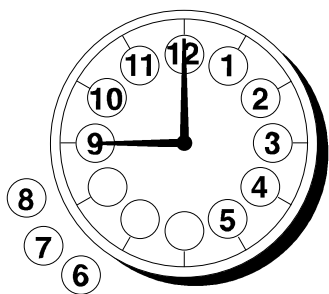
さて、昔々、人々の時間の概念には **hour**（時）はありましたが、それよりも細かい時間を表す概念はなかったようです。したがって「分」とか「秒」という単位はなかったということになります。必要な場合には **minute**「細かい時」を用いて表していました。「一番目の細かい部分」という意味のラテン語 *pars minuta prima* にその起源を求めることができます。今でも **minute** には「細かい」という意味が残っていますね（発音はマニユートとなりますが）。**minute** は元々は「分」という意味ではなくてこの「細かい」という意味のほうが古い、ということです。ちなみに **menu**（メニュー）も語源が同じです。メニューには料理の名前が「細かく」書いてあるからです。

そこから、より細かい時間の単位である「秒」はラテン語の「二番目に細かい部分」を表す *pars minuta secunda* に由来します。**second minute**（2番目の細かい時）としか表せなかったのです。

ところが毎度毎度 **second minute, second minute** と呼ぶのは煩わしかったのでしょう。**minute** を省略して単に **second** とだけ呼ぶようになり、現在の「秒」という意味が定着したようです。

洋の東西を問わず、人間というのはやはり言葉を短縮したり省略したりしたがるものなのでしょうね。1日を24に分けたものが「時間」、中世ヨーロッパで、この「時間」を「1番目に」分割して生まれたのが「分」、この「分」をさらに分割する必要が生まれ、「2番目に」作られたのが「秒」なのです。

「2番目に細かい部分」だった！



Check!
👉

17. 過去形はどんな意味？



英語の動詞は皆さんもご存じの通り、「原形」、「現在形」、「過去形」、そして「過去分詞」という種類があります。この中で「過去形」は、例えば

I went to Kyoto last Sunday. (僕はこの前の日曜日に京都に行った。)

のように、一般に過去の出来事などを表しますが、この「過去形」は必ずしも過去のことを表すわけではありません。「えっ？」と思うかも知れませんが、事実です。では動詞の「過去形」は一体何を表しているのでしょうか。

実はこの「過去形」は現在の自分からの距離感を表しています。現在の自分と距離が近いもの、例えば現在のことや習慣となっているようなことは現在形で表します。そして現在の自分から遠い事柄については「過去形」を用いるのです。それは次の3つの事柄になります。

- | | | |
|--------------------|---|----------|
| ① 現在の自分から遠い「事実」 | } | 全て距離感を表す |
| ② 現在の自分の状況から遠い「理想」 | | |
| ③ 現在の自分から遠い「人間関係」 | | |

まず①ですが、現在の自分から遠い事実、例えば過去の出来事は過去形を用います。「それなら遠い未来のことも過去形のことで表すのか？」という疑問があるでしょうが、ご存じの通り、動詞には「未来形」はありません。従って動詞のみで表せる距離感は過去のことでしかないのです。未来のことは will という助動詞の助けが必要となります。

次に②ですが、例えば「今僕が金持ちなら、大きい家が買えるのに。」のように現在の自分からかけ離れた仮定の話をするときには、たとえ現在のことであっても動詞の過去形を用いて表現します。とても距離がありすぎて実現できない、ということです。これがいわゆる「仮定法」と呼ばれるものです。

最後に③ですが、親しい友人など人間関係が近い人に対しては日本語でもざっくばらんに「ちょっと窓を開けてくれないか。」のように話しかけるものですね。英語では、

Will you open the window?

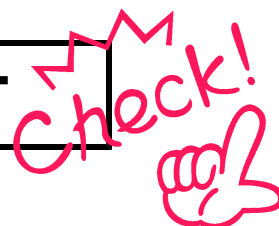
とでもいうところでしょう。ところがそれほど親しくない人に対しては、「窓を開けていただけませんか。」と控えめに、丁寧に話しかけるのが一般的です。それと同様英語でも話し相手との人間関係の距離感を表すために

Would you open the window?

というように過去形を用います。これが英語の丁寧表現と呼ばれるものです。この Would は決して過去のことを表しているわけではありません。

このように英語で「過去形」を用いている場合には、何かしらの距離感を表している、というのが共通のルールです。

過去形は自分からの距離感を表す



18. aとan

～anはoneより出でてaに引き継がれる?～



普段日本語を使っている人にとって、外国語、特に英語を学習する上でもっとも修得の困難なものの一つに冠詞 (**a, an, the**) があります。どういう場合に必要でどういう場合には必要ではないのか、またある場合と無い場合でどのように意味は異なるのか。この話をするだけでも、かなりの時間がかかってしまい、一冊の本ができあがってしまうほどです。

その中で「不定冠詞」と呼ばれる **a** と **an** について今回は説明しますが、中学校の1年生で学習するこの2つの不定冠詞。確か先生からは「普通は名詞の前に **a** をつけるのだけれど、名詞が母音で始まる単語の前には **an** をつけるんですよ。」と習ったはずですが。

例) book → a book

apple → an apple

どうでしょう。違いましたか？

ところが英語という言語の歴史をたどっていくと、これは嘘なのだということに気づきます。

実は昔「一つの」という意味を表す冠詞は **one** もしくは **ān** でした。つまり数字の「1」から発生したものです。これはフランス語でも不定冠詞は **un(e)**、スペイン語でも **una** か **uno** で数字の「1」と同じです。英語でも歴史的に見ると **one** → **an** → **a** と変化したもので、**a** が基準ではないのです。意識して強く **one** と発音すれば「1つ」という和を強調しており、数と言うより同じ物が数多くあり、そこから任意に1つ取り出せばというときには **an** が使われていたのが、より弱くなって母音以外は全て **a** と発音され綴られるようになったものなのです。したがって、正しくは「**名詞の前にはanがつくが、子音で始まる名詞の前にはaがつく**」ということになります。英語の話者は、母音と母音を連続して発音することに慣れていません。そのため、**a** と名詞の最初の母音との間に **n** を入れることによって「母音+母音」という発音しにくい形を避け、「母音+n+母音」という発音しやすい形にしているのです。昔は全て **an** で統一されていたのですが、やがて子音字で始まる名詞の前では、母音が重なることがないので、**n** が脱落するようになり、現在の **a** が生まれたわけです。

ここで面白い単語があります。**nickname** という語は元々は **ickname** と綴っていたのですが、**an ickname** の **n** が **i** とくっついて、**a nickname** と誤解されて現在のような形「ニックネーム」となっています。反対に、台所で活躍する **apron** 「エプロン」は元々は **napron** と綴っていましたが、**a napron** の **n** が冠詞の **a** とくっついて **an apron** となり現在の「エプロン」となっています。

たかが **an** と **a**、されど・・・というところでしょうか。やはり言語というのは歴史とともに歩む、ということなんですね。

一方、同じように、**the** も普通は弱く発音されますが、こちらはもともとは **that** の意味で何かを指すのに使われたものです。しかし、現在では特別の場合を除いて「例のあの」と分かれば軽く **the** をつけることになったものです。

one→an→aという流れだった！



19. 受け身のbyって？ ～by以外の前置詞を取る受動態も



中学校で「be+過去分詞+by」で受け身(受動態)を表すと習いました。「なんで **by** を使うんだろう？」と疑問に思ったことはありませんか。また、**by** 以外の前置詞を取る受動態として、**be known to**, **be surprised at**, **be covered with**, **be satisfied with** などがある、と機械的な棒暗記に終始していませんか？実はこれにもちゃんとした理由があります。

実は、歴史的には、この **by** は場所を表す前置詞の用法「～のそばに」に起因しています。The mouse was killed **by the cat**. というのは「ネズミが殺された」という状況と、それが「猫」の近くということなのです。おそらく「猫が殺したんだろう」という関係づけがなされるわけですね。The window was broken **by John**. の場合は「窓が壊れていた」という結果の状態が描かれ、そしてそれに **by John** で「そのそばにジョンがいる」という情報が追加されているのです。当然ジョンがその状態に関与しているという推測が成り立つことになるわけです。そういった情報を統合した解釈として「ジョンが窓を壊した」という意味合いが生まれたというわけです。

by = 近くにあるもの → 行為者【影響を与えた者】

さて、それでは **be satisfied with** を考えてみましょう。「～に満足している」という状態が「～とともにあって」という時間的な長さ(所有状態)を意味する **with** が使われているのです。**with** を使うもの、**be pleased with**, **be crowded with**, **be covered with**, **be filled with**, などみな「～とともにあるまま」という感情の長さや、しばらくその状態が続いている感じを意味する **with** がぴったり合っていますね。**be covered with** ～「～でおおわれている」は山が雪と一緒にともなっている状態と考えましょう。

今度は **be surprised at** です。「驚く瞬間」というのは時間軸上の「一点」です。その時間軸上の1点を表す単語が **at** なのです。

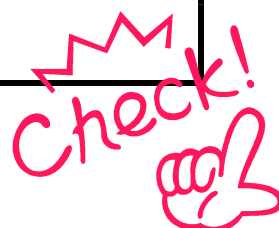
be interested in はどうでしょう。「興味を持っている」ということは、「様々なものの中からある特定のものに興味を抱くわけですから、「内包」を表す前置詞の **in** を用いるのです。その対象に没頭し、中へ入り込むイメージですね。

be known to ～はどうでしょう。前置詞 **to** は「着点」を表します。したがって、**be known to** ～「～に知られている」では、前置詞 **to** は「誰に対して知られているのか」という到達点を意味しているのです。

Taro is known to everyone in this school.
太郎はこの町のみんなに知られている。



受け身のbyも「～のそばに」



20. onとabout(～について)



「～について」という意味の前置詞に関して、**about** と **on** の両方があるのですが、その意味の違いについて、英和辞典には「**about** は一般的な内容に関して、**on** は専門的で高度な内容に関して用いる」という注記がなされています。一体どこからこのような差異が生まれてくるのか考えてみましょう。**about** はもともと「～のまわり」を意味するところから (run about)、物事の本質よりも周辺部やそれに関連する領域に焦点がいきます。それに対して、**on** は基本的にある面への接触を表すので、接触部分に限定する響き、すなわち周辺部ではなく本質に限る感じが生まれるわけです。したがって、ペチャクチャしゃべるといったたわいもない話の時には **about** が (gossip や rumor などの動詞と結びつきやすい)、専門的な話の場合には **on** が (lecture や preach などの堅い動詞と結びつきやすい) 好まれるわけです。次の用例を比較してみてください。

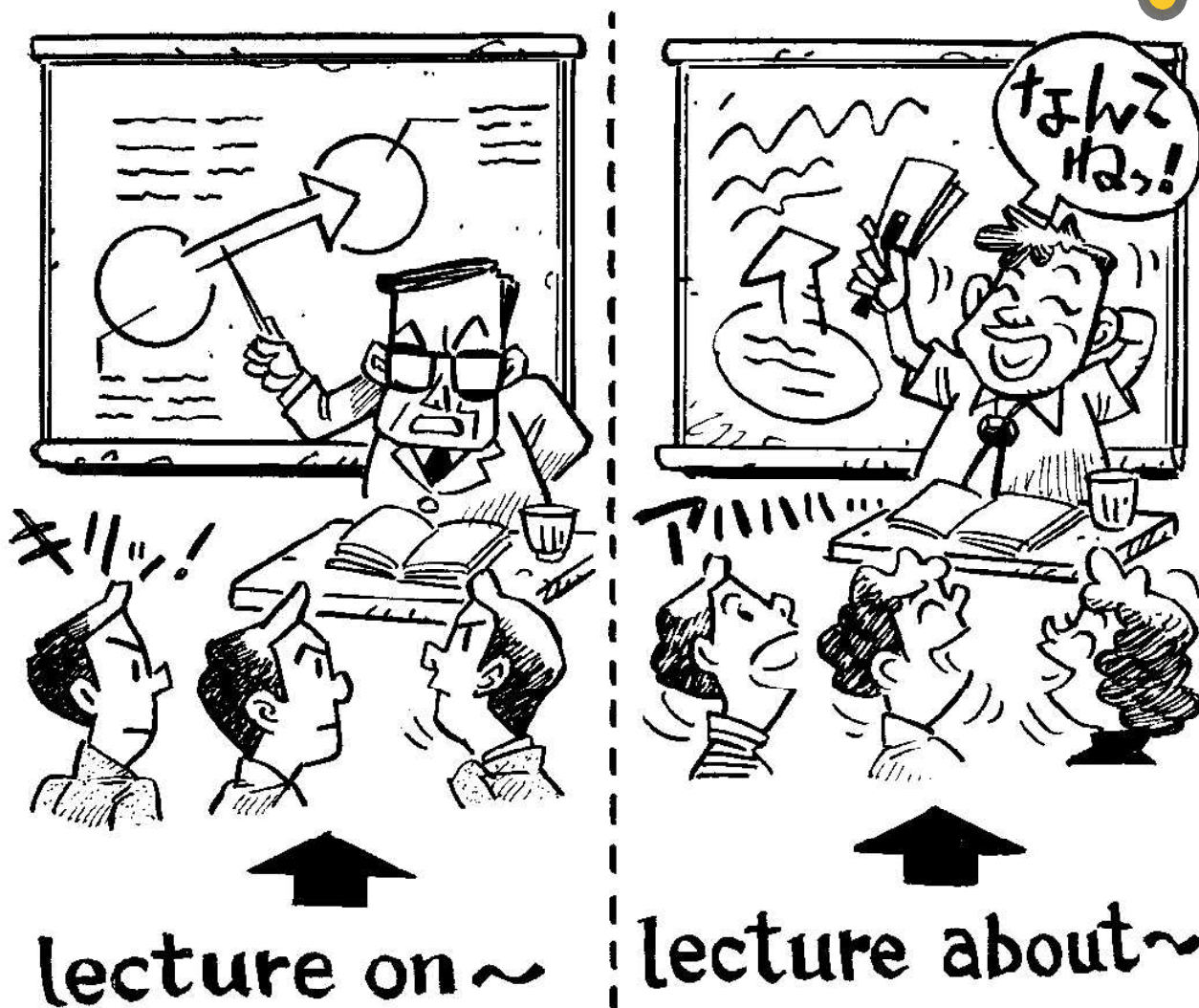
a book **about** bees

ミツバチについての本

a lecture **on** the behavior of bees

ミツバチの行動に関する講義

これで分かったでしょう。次のイラストでもバッチリ理解できますね。



— 阿部 — 『「なぜ」から始める実践英文法』(研究社)

21. have to～がどうして 「～ねばならない」?



基本的なことです、**have to**～がどうして「～しなければならない」という意味になるか考えたことがありますか？実は、これは次のような不定詞の形容詞用法がその起源です。古い文法では **have something to do** と **have to do something** は同じ意味だったのです。

I have a lot of things *to do*. 私にはするべきたくさんのことがある。

have + 名詞 (to do)

～すべき名詞がある



have (to do) + 名詞

名詞をしなければならない

to do の意味が強いために、動詞の部分に移動した結果、have to do という形が生まれたのです。

She has a lot of work to do.

この箇所を問う疑問文に



What does she have to do?

同じ

She has to do a lot of work.

この箇所を問う疑問文に



What does she have to do?

そうか！



have + 名詞 + to do から
have to do + 名詞 へ！

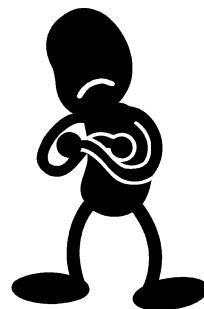
Check!
👉

22. almost, always, already, also の意味を考える



英語の副詞には **al-**で始まる次のようなものがあります。次の単語が、なぜそんな意味になるのか考えたことがありますか？

almost	「ほとんど」
always	「いつも」
already	「すでに」
also	「～もまた」



この **al(=all)** は「まったく」という強めを表す語です。したがって **almost** は **all** (まったく) + **most** (大部分) に分解できるので、「全体のほぼ大部分」を指す意味だとわかります。量、数、時間、行動が全体にほぼ到達していることを表しているのですね。

always は **all** (まったく) + **way** (道) + **s** となります。つまり「必ずその道を進んでいる」という意味です。いつもそのような行動をするという意味ですね。なお語尾の **-s** は副詞の状態を表す語尾で、英語にはかなり見られます。cf. besides, towards, indoors, nowadays, sometimes, perhaps **otherwise** という単語が、①もしそうでなければ、②別の方法で、③その他の点では、という三つの意味を持つのも、**other + ways** と考えてやれば、一目瞭然ですね。**clockwise** (時計回りに) も同様です。

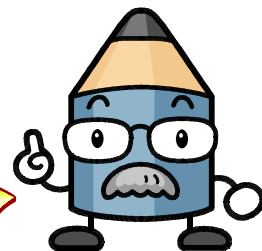
already は **all** (まったく) + **ready** (準備ができた) で、「十分に準備ができています」ということで「すでに、もう」という意味になるのは簡単でしょう。**already** が現在完了の肯定文によく使われ、普通は疑問文に使われることがないのは、「行動がすでに終わっている」かどうか分からないからです。

also は **all** (まったく) + **so** (そのように) ということで、あるものや人に対して「まったくそのようなもの(人)」であるというときに使われます。「～もまた、なお」という意味になるのは分かりますよね。

英語の単語力を増強するには、絶えずこのような「気づき」を心がける態度が必要です。八幡成人『英単語はアタマ・オナカ・シッポで攻略だ！』(自費出版) はそんな気づきを促す本です。活用しましょう。

《本講座の結論》

GO!



なぜ？と疑問に思ったことは
分かるまで徹底的に調べてみましょう！